

小児科だより vol.58

新型コロナワクチンの小児への接種承認

2021.7.1 発行

こんにちは。国外での小児（12歳～15歳）を対象とした接種経験などをもとに、我が国でも6月1日に12歳以上の小児に対する、新型コロナワクチン（以下、ワクチン）の接種が適用となりました。

ワクチンの接種に関しては、インターネット、SNS、マスメディアなどでも連日大きく取り扱われ、様々な期待、不安、恐れなどを抱く方もいらっしゃるかと思います。

6月16日に日本小児科学会の予防接種・感染症対策委員会から、ワクチン接種に関する提言が発表されたので、今月の小児科だよりでは、その趣旨についてお話させていただきます。詳細に関しては、小児科学会のホームページをご参照ください。

子どもへの感染源の多くは周りにいる成人であることから、子どもを感染から守るためには、まず周囲の成人が免疫を獲得することが重要です。16歳以上の約4万人を対象とした国外の研究では、2回接種後のワクチンの効果は95%で、発症を予防する高い効果が報告されました。ワクチン接種により、周りの成人から子どもへの感染が予防できる可能性が期待されます。特に重症化が懸念される医療的ケア児などに関わる業務従事者、重篤な基礎疾患のある子どもに関わる業務従事者、および健康な子どもに関わる業務従事者は、職務・勤務形態を問わずワクチンを接種することが重要と考えられます。

重篤な基礎疾患のある子どもへの接種に関しては、重症化を防ぐ可能性がある一方で、本人の健康状況をよく把握している主治医と養育者との間で、接種後の体調管理などを事前に相談することが望ましいと示されています。

12歳以上の健康な子どもへの接種に関しては、先行する成人の接種状況を踏まえて慎重に実施されることが望ましく、また、接種にあたってはメリットとデメリットを本人と養育者が十分に理解していること、接種前・中・後におけるきめ細やかな対応を行うことが前提であり、できれば個別接種が望ましいと考えます。やむを得ず集団接種を実施する際には、本人と養育者に対する個別の説明をしっかりと行う配慮が望まれ、また、ワクチン接種を希望しない子どもと養育者に対しては、特別扱いされないような十分な配慮が必要と考えられます。小児COVID-19が比較的軽症である一方で、国外での小児を対象とした接種経験などでは、ワクチン接種後の発熱や接種部位の疼痛などの副反応出現頻度が比較的高いことが報告されています。十分な説明がないまま副反応が発生することが無いようにすることが重要であると考えます。

